

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25670069

研究課題名(和文) 離島・僻地における医薬品適正使用のためのリスクコミュニケーションシステムの構築

研究課題名(英文) Construction of a risk communication system to encourage the correct use of medicine in remote islands/rural communities

研究代表者

澤田 康文 (SAWADA, Yasufumi)

東京大学・薬学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80114502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：平成25年からモデル地域において「薬剤師が存在しない離島」におけるお薬教室・相談会を継続して行った。その結果、薬物治療にかかわる相談も増える傾向が見られた。今後は離島の医師と連携し、一次離島や都市部の薬剤師が二次離島住民のOTCや健康食品を含めた薬剤管理を行うシステム構築を推進する。全国の離島および都市部住民にOTC薬の使用実態や薬剤師へのニーズ調査などに関するwebアンケート調査を行った。その結果、薬剤師の職能への認識は離島住民において低い傾向が見られた。そこで、薬剤師の職能への理解を高めるために患者向けの小冊子「みんなの薬剤師・みんなの薬」を改良し全域に配付した。

研究成果の概要(英文)：Since 2013, medicine classes and consultation sessions on “remote island communities without pharmacists” have been held in the model area. Consequently, there has been an increase in consultations regarding the use of medicine. The new plan is to develop a system, in collaboration with medical doctors on remote islands, in which pharmacists in the primary remote islands or in urban areas manage OTC medicines including health foods for residents in secondary remote islands. An Internet-based questionnaire on the use of OTC medicines and pharmacist needs was conducted with residents of remote islands and urban areas across Japan. The results show that recognition of the pharmacists’ skills is lower among the residents of remote islands. In order to enhance understanding of the pharmacists’ skills, the pamphlet directed toward patients, “Everyone’s pharmacists, everyone’s medicine,” was revised and sent to all areas.

研究分野：育薬研究

キーワード：離島・僻地 薬剤師 リスクコミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

セルフメディケーションへの関心の高まりを背景に、一般用(OTC; Over The Counter)医薬品の適正使用推進は焦眉の急であり、2009年6月よりOTC医薬品の新販売制度がスタートした。OTC医薬品はリスクに応じて第一類(一部の胃薬や抗アレルギー薬など)、第二類(主なかぜ薬、痛み止め、漢方薬など)、第三類(ビタミン剤、主な整腸薬など)に区分されると共に、第一類は薬剤師による対面での情報提供が必須となり、第二類と第三類の販売に携わる登録販売者制度が設けられる等、OTC医薬品に関する情報提供と相談体制は充実しつつある。更に、第一類と第二類の郵便等販売(ネット販売を含む)が禁止されたが、この規制の是非に関しては、現在でも安全性や利便性の観点から様々な議論が展開されている。

我々が、長崎県の離島居住者を対象に実施したアンケート調査では、OTC医薬品のネット販売に対するニーズは低く、専門家を介した入手に対するニーズが高かった[平山ら, 薬学雑誌, 131(5):783-799, 2011]更に、長崎県の離島地域の薬局を対象に行った調査では、医療用医薬品でさえ、在庫のない医薬品を卸等から入手できず、処方箋応需当日に患者に交付できない事例が少なからず(処方箋2,500枚につき1例)存在している[田中ら, 医療薬学, 30(10):656-663, 2012]従って、離島・僻地におけるOTC医薬品の安心・安全な使用を実現するためには、都市部とは異なる医薬品とその情報の供給・管理、医薬品適正使用モデルが必要であると考えられる。

2. 研究の目的

本邦は多くの離島・僻地を抱え、薬局・薬店のない地域や、薬剤師不在の地域が少なくない。過疎化、高齢化、交通の不便さ等は共通の課題である。近年のセルフメディケーションへの関心の高まりや、一般用(OTC)医薬品の新販売制度のもと、このような地域に居住する患者・消費者による安心・安全な医薬品使用を実現するために、本研究では、離島・僻地における医薬品とその情報の最適な供給・管理体制、薬剤師・登録販売者と患者・消費者とのリスクコミュニケーションの現状や望まれるあり方を明らかにし、医薬品適正使用を推進するためのシステムを構築することを目的とする。

(離島の定義: 一次離島とは、「薬局・ドラッグストア、薬剤師が存在する離島」、二次離島とは、「薬局・ドラッグストア、薬剤師が存在しない離島」を指す)

3. 研究の方法

(1) モデル地域(長崎県)におけるお薬教室・相談会の開催とアンケート調査

モデル地域(長崎県)の二次離島において、研究協力者によるお薬教室・相談会の開催および参加者に対するアンケート調査を行った。アンケート調査の項目は、医療用医薬品に関する質問の他にOTC医薬品(一般用医薬品)に関して

- ・OTC医薬品は誰の説明を聞いて購入するか
 - ・薬について誰に質問することが多いか
 - ・薬(全般)の説明は誰から聞くのがわかりやすいか
 - ・薬剤師の仕事として、知っている内容
 - ・今後の薬剤師に対する要望
- といった点について調査を行った。

(2) 日本全国の離島と都市部における一般消費者対象のweb調査

離島や都市部におけるアンケート調査は、民間インターネットリサーチ会社(株式会社インテージ)に委託し、無記名自記式Webアンケート調査を行った(平成26年12月-平成27年2月)。

調査対象

離島...2012年離島統計年報を参考に全国に存在する離島振興法指定離島256島、小笠原諸島振興開発特別措置法指定離島2島、奄美群島振興開発特別措置法指定離島8島、沖縄振興開発特別措置法指定離島39島の計305島を対象とした。

県内の都市部...各県の県庁所在地とした。

OTC医薬品に関する質問項目としては

- OTC医薬品を購入する頻度
- OTC医薬品を購入する場所
- OTC医薬品は誰の説明を聞いて購入するか
- OTC医薬品使用中のトラブルの有無

薬剤師に対するニーズ調査として

かかりつけ薬剤師を持っているか、否か、持ちたいか

薬剤師の仕事について知っていること
薬剤師が自宅まで病院のお薬やOTC医薬品を持って来てくれることに対する意見を質問し、OTC医薬品使用実態・医薬品への理解及び薬剤師へのニーズを検索した。

なお、本調査は、東京大学大学院薬学系研究科・薬学部「ヒトを対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得て行った(平成26年10月31日承認)。

4. 研究成果

(1) モデル地域(長崎県)におけるお薬教室・相談会の開催とアンケート調査

平成25年度は、二次離島7島(久賀島、嵯峨島、黄島、赤島、桜島、前島、黒島)11回、平成26年度は、二次離島7島10回、

一次離島 1 島 (奈留島) 1 ヲ所においてお薬教室・相談会を開催し、アンケート調査を行った。

平成 25-26 年度にお薬教室・相談会に参加した二次離島住民は計 142 名で年齢層は、70 歳代が 38.7%、60 歳代が 24.6%と 60 歳以上が半数以上を占めた。男性が 43.7%、女性が 56.3% であった。上記の二次離島には、診療所のみが存在し、薬局がないため住民特に高齢者は、薬剤師に対してほとんどなじみが無い。したがって、医療用医薬品に関しては医師から説明をうけている者が半数以上を占め (51.4%)、薬剤師から説明をうけている者 (21.1%) を上回った。また、医療用医薬品に関しての質問も医師に投げかける者が多く (54.9%)、薬剤師に質問する者 (15.5%)、看護師に質問する者 (16.9%) を上回った。

一般用医薬品購入時には、薬剤師に説明を聞く者の割合が一番多かったが (27.5%)、誰にも相談しない購入者も 12.7% 存在した。さらに薬剤師の仕事として住民に認識されていたのは、「医師が指示した薬を患者にわたすこと」が 79.6% と最も多く、「一般用医薬品の販売・相談の受けつけができること」 (26.1%)、「定期的なお薬説明会や相談会を行う」 (26.%) に対しては認識が低かった。

今後の薬剤師への要望 (複数回答) としては、定期的なお薬教室・相談会の開催が最も多く (47.8%)、ついで病院や診療所でもらう薬の説明 (34.5%) であり、一般用医薬品の定期的な配達希望は少なかった (13.4%)。

これまでの経過から [平山ら, 薬学雑誌. 133(8):913-922.2013.] お薬教室・相談会の回を重ねるに伴い薬剤師に対する認知度は上昇し、OTC 医薬品についても薬剤師に説明をうけて購入する者の割合や OTC 医薬品に関して薬剤師に質問する割合は増えて来たが、離島における住民の薬剤師に対する認識がまだ十分ではないことから、薬剤師の活用を啓蒙する小冊子「みんなの薬剤師・みんなの薬」(薬剤師と上手につきあう心得 11 箇条、薬への理解を深める 4 箇条) (B5 版、34 頁) を作成した。今後もお薬教室・相談会を継続して行うが、その際に本冊子を離島住民に配付すると共に、本冊子の内容を事例化した紙芝居を作成しお薬教室・相談会のテキストとして使用する予定である。

また、病院や診療所でもらう薬の説明を薬剤師に望む声も多かったことから、診療所の医師とも連携をとり、一般用医薬品のみならず医療用医薬品も含めた離島住民の薬剤管理に一次離島薬剤師が介入していけるようなシステム作りを志す。

(2) 日本全国の離島と都市部における一般消費者対象の web 調査

・有効回答数：都市部 3978 名、一次離島 1502 名、二次離島 159 名から回答を得た。
 ・回答者割合の多かった性別年齢層は、都市部、一次離島、二次離島ともに、男性 40-49 歳、女性 30-39 歳 (二次離島は、女性 40-49 歳と 30-39 歳は同率) であった。
 各質問事項に対する結果を以下に示す (表示は割合 (%))。一次離島、二次離島はそれぞれ一次、二次と略す。特記しない場合の各群の母数は、都市部 3978、一次離島 1502、二次離島 159 である。

OTC 医薬品を購入する頻度は、どの群においても殆ど購入しない割合が多かった (表 1)。

表 1. OTC 医薬品を購入する頻度 (複数回答)

	毎週何月にか購入	月に何回購入	殆ど買わない	買った事無い	他
一次	0.7	31.0	61.9	4.0	2.4
二次	0.6	31.4	59.7	5.0	3.1
都市部	0.6	28.7	63.4	5.4	1.9

その他は、「必要に応じて」「年に 1-2 回」「2-3 ヶ月に 1 回」などであった。

OTC 医薬品を購入する場所として、コンビニの使用割合はどの群も少なかった (表 2)。

表 2. OTC 医薬品を購入する場所 (複数回答)

	a	b	c	d	e	f
一次 (n=1442)	11.5	93.2	6.2	4.9	1.2	7.8
二次 (n=151)	6.6	84.1	11.3	10.6	0.7	15.9
都市部 (n=3765)	7.9	94.4	2.1	8.3	1.9	2.6

a. 病院の薬をもらう薬局
 b. ドラッグストア・薬店
 c. ネットの医薬品販売サイト
 d. スーパーの中にある薬店
 e. コンビニ
 f. 配置薬 (置き薬)
 その他には、「職場」、「実家からおくってもらう」などがあった。

OTC 医薬品を購入する際には、誰にも相談せず自己判断で購入する割合がどの群にも多かった (表 3)。

表 3. OTC 医薬品は誰の説明を聞いて購入するか

	A	B	C	D	E	F
一次 (n=1442)	3.7	15.5	1.0	0.1	12.3	4.4
二次 (n=151)	6.0	12.6	0.7	0.0	11.9	4.6
都市 (n=3765)	4.9	19.8	0.9	0.2	13.0	4.0

	G	H	I	J	K
一次	11.7	5.8	54.6	6.0	1.6
二次	6.6	6.6	62.3	6.0	0.7
都市	10.3	4.5	53.1	4.1	1.1

A. 医師に相談 B. 薬剤師に相談
 C. 看護師に相談 D. 保健婦に相談
 E. 家族に相談 F. 友人・知人に相談
 G. 登録販売者に相談
 H. 配置薬（置き薬）の販売員
 I. 誰にも相談せず自分で決める
 J. テレビの宣伝で見たのを買う K. その他
 その他で多かったのが、「インターネットで調べる」であった。

OTC 医薬品使用中のトラブルに関しては、OTC 購入者の殆どが、OTC 購入後のトラブルを経験していなかったが（一次離島 94.9%、二次離島 94.0%、都市部 95.9%）、各群約 5%に相当する購入者が、副作用がでたり、効果を感じなかったりといったトラブルを経験していた。

かかりつけ薬剤師を持ちたいかとの問いに対して、持ちたくないとの回答がどの群でも多かった（表 4）。持ちたくない理由として多かったのは、各群とも「めんどろである」「べつに必要性を感じていない」「今病気じゃないので」などであった。

表 4. かかりつけ薬剤師を持ちたいか

	既に持っている	持ちたい	持ちたくない
一次 (n=1502)	11.5	40.2	48.3
二次 (n=159)	5.7	43.4	50.9
都市部 (n=3978)	11.3	38.9	49.7

薬剤師の仕事について知っていることを尋ねたところ（複数回答）、一般消費者が薬剤師の仕事として認識している項目として各群共通で最も多かったのが、「薬剤師は、医師が処方した薬を患者に渡す」（一次離島 81.3%、二次離島 80.5%、都市部 82.7%）であり、最も認識されていない項目は各群とも「薬剤師は、地域の住民に対して定期的なおくすり説明会を行う」であった（一次離島 3.9%、二次離島 1.9%、都市部 4.1%）。

また、「薬剤師は、患者の自宅に薬を届けたり、薬の整理をする」に対しても認識が低く（一次離島 11.0%、二次離島 8.2%、都市部 13.5%）、「薬剤師は、医師の処方に間違いがあれば医師に変更を提言する」に対してもあまり認識されていなかった（一次離島 27.7%、二次離島 27.0%、都市部 34.0%）。

薬剤師が自宅まで病院のお薬や OTC 医薬品を持って来てくれることに対して、「良いことだと思うが、別に必要性を感じていない」がどの群においてももっとも多かった

（一次離島 58.1%、二次離島 52.8%、都市部 58.4%）。「良いことだと思うし、来て欲しい」は一次離島 24.0%、二次離島 28.3%、都市部 20.3% と、少ないながらも希望する消費者が存在した。

以上、全国の離島や都市部における OTC 医薬品使用実態および薬剤師に対するニーズ調査を行う事ができた。本 web 調査においては、調査対象の年齢層が低いことも影響して、一般消費者の OTC 医薬品使用実態や動向に関しては、一次離島や二次離島、都市部で良く似た傾向を示すことが示された。

またどの地域においても薬剤師の存在自体やその仕事に対する認識はあまり高くはない事も示されたため、今後は薬剤師が能動的に活動し、OTC 医薬品を含め、「全ての薬剤管理は薬剤師に任せたい」と一般消費者・患者から信任されるような体制を作る必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤田康文 (SAWADA, Yasufumi)
 東京大学大学院薬学系研究科 (薬学部)
 教授

研究者番号：80114502

(2) 研究分担者

佐藤宏樹 (SATO, Hiroki)
 東京大学・大学院薬学系研究科 (薬学部)
 助教

研究者番号：80451855

三木晶子 (MIKI, Akiko)

東京大学・大学院薬学系研究科 (薬学部)
 講師

研究者番号：80646323

(3) 研究協力者

平山匡彦 (HIRAYAMA, Tadahiko)
 宮崎長一郎 (MIYAZAKI, Cho-Ichiro)
 社団法人長崎県薬剤師会
 五島保健所
 五島市役所健康政策課